

教員養成系大学生の大学教育観と学習態度の特徴

寺島幸生

(キーワード：大学教育，学習態度，教員養成系大学)

1 研究の背景と目的

大学を取り巻く環境は、少子高齢化、グローバル化、国際競争の激化、社会的・経済的格差の拡大、産業・就業構造の変化などの諸課題を背景として、かつてないスピードで激変している。常に変化し続ける社会状況に対応すべく、生涯学び続け、主体的に考え、行動できる人材やグローバル社会で活躍する人材、イノベーションを創出する人材、異なる言語、世代、立場を超えてコミュニケーションできる人材の育成が大学に求められてきた(文部科学省，2012)。大学教育の質的転換がより強く求められ、大学には、「卒業認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)」、「教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)」、「入学者受け入れの方針(アドミッション・ポリシー)」の3つのポリシーを一貫性あるものとして策定し公表することが義務化された。学生も大学で何を身につけ、何ができるようになったのかを問われるようになり、学生の教育成果保証への要求も高まっている。一方で、少子高齢化と人口減少に伴う18歳人口の急減によって、50%を超える大学進学率が示すように大学は大衆化し、入学者の質保証が課題となっている。

上記の背景を踏まえ、大学生の学習・生活全般にわたる意識や行動を多様な観点から捉え、今後の大学教育の在り方を考えるための基礎データを得ることなどを目的として、学生の学習や生活に関する実態調査が公的研究所(国立教育政策研究所，2016)や民間の教育研究機関(ベネッセ，2013，2017)、各大学(鳴門教育大学，2013)等において実施され、それらの結果が報告、分析されている。

本研究では、これまでに実施された大学生の学習・生活実態調査の質問紙を活用して、国立の教員養成系大学に在学する学部学生の学習状況について調査した。この調査の主な目的は、同大学生の実態を把握し、今後の大学教育や教員養成の在り方を考えるための基礎資料を得ることである。本稿では、この調査の概要を簡潔に報告し、この大学生が選好する大学教育および授業に対する姿勢や取組の特徴について整理する。

2 調査の概要

今回の調査は、2017年6、7月、徳島県内の国立教員養成系N大学において、以下の要領で実施した。質問項目として、ベネッセ教育総合研究所が2008年から4年毎に実施している「大学生の学習・生活実態調査」で使用している質問紙(ベネッセ，2013)の中から、大学での学習に関する項目を一部抜粋して使用した。主な分析対象とした質問項目を抜粋して図1に示す。例えば、大学教育観に関する質問⑮は、1)～14)の大学教育の考え方について、提示されたA、Bのいずれかを選択して回答する形式である。また、質問⑳では、授業への取組に関する1～26の各項目に対して、「1 とてもあてはまる」、「2 まああてはまる」、「3 あまりあてはまらない」、「4 全くあてはまらない」の選択肢から1つを選んで回答する形式である。この他にも、1週間に大学に通う日数や大学で過ごす時間、サークルや部活動、アルバイトの状況、授業への出席頻度に関する質問項目を、同質問紙(ベネッセ，2013)から抜粋して設定した。また、学年、性別、専攻等の情報を得るため、N大学が隔年で実施している「学生生活実態調査」の質問項目(鳴門教育大学，2013)を一部使用した。

N大学学校教育学部の「初等理科教育論」の授業の受講者に対して、上記の質問紙(無記名)を配布し、記入後にその場で回収する方法で調査を実施した。当該科目は、同大学小学校教育専修および特別支援教育専修の必修の教職共通科目(標準履修年次2年，2単位)であり、免許法施行規則では各教科の指導法に区分される教職に関する科目である。幼児教育専修、中学校教育専修においては選択必修科目であるが、小学校教諭一種免許状取得に係る科目であることから、例年、同学部2年次生ほぼ全員と、標準3年間で学部および大学院の授業科目を履修して教員免許を取得する学校教員養成プログラムで入学した大学院生(長期履修院生)が履修している。

88 大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。それぞれ近いものをお選びください。

- 1) A: あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい
B: 単位をとるのが難しくても、自分の興味のある授業がよい
- 2) A: 出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい
B: 定期試験や論文、レポートなどを重視して成績評価をする授業がよい
- 3) A: 応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい
B: 基礎・基本は少ないが、応用・発展的内容が中心の授業がよい
- 4) A: 教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい
B: 学生が自分で調べて発表する演習形式の授業が多いほうがよい
- 5) A: 大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい
B: 大学では特定の専門分野の知識や技能を身につけたほうがよい
- 6) A: あまり自由に選択履修できなくても、系統立って学べるほうがよい
B: あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい
- 7) A: 大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい
B: 大学での学習の方法は、学生が自分で工夫するのがよい
- 8) A: 学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい
B: 学生は授業を通じて、将来やりたいことをみつけるほうがよい
- 9) A: 授業以外でも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい
B: 授業以外では、大学の教員は必要以上に学生と交流しなくてもよい
- 10) A: 学生生活については、大学の教員が指導・支援するほうがよい
B: 学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい
- 11) A: 就職については、大学の指導・支援にもとづいて活動する方がよい
B: 就職については、学生の自主性にもとづいて活動する方がよい
- 12) A: 高校までに習得すべき基礎学力の不足は、大学が授業で指導すべきだ
B: 高校までに習得すべき基礎学力の不足は、学生が自主的に補うべきだ
- 13) A: 大学では、答えのない問題について、自分なりの解を探究する学びが重要だ
B: 大学では、既にある学問の知識について、体系的に修得する学びが重要だ
- 14) A: 学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、大学の教育の責任だ
B: 学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、学生自身の責任だ

89 あなたは大学での授業に、ふだんからどのように取り組んでいますか。それぞれについて、あてはまるもの1つをお選びください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1. 授業の予習をする	1	2	3	4
2. 授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する	1	2	3	4
3. 授業に遅刻しないようにする	1	2	3	4
4. 履修登録した科目は途中で投げ出さない	1	2	3	4
5. 授業中は黒板に書かれていない内容もノートにとる	1	2	3	4
6. 授業中に私語をしない	1	2	3	4
7. 授業でわからなかったことは先生に質問する	1	2	3	4
8. 授業で出された宿題や課題はきちんとやる	1	2	3	4
9. レポートやテストを提出する前に見直す	1	2	3	4
10. クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする	1	2	3	4
11. グループワークやディスカッションで自分の意見を言う	1	2	3	4
12. グループワークやディスカッションでは、積極的に貢献する	1	2	3	4
13. グループワークやディスカッションでは、進んでまとめ役をする	1	2	3	4
14. グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する	1	2	3	4
15. 授業の復習をする	1	2	3	4
16. 授業でわからなかったことは、自分で調べる	1	2	3	4
17. 授業に興味をもったことについて自主的に勉強する	1	2	3	4
18. 授業で配布された資料などを整理する	1	2	3	4
19. 授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する	1	2	3	4
20. グループワーク以外で、友だちと一緒に勉強する	1	2	3	4
21. 資格や免許の取得をめざして勉強する	1	2	3	4
22. 大学以外の学校などに通って勉強する	1	2	3	4
23. 計画を立てて勉強する	1	2	3	4
24. 自分の意思で継続的に勉強する	1	2	3	4
25. できるかぎり良い成績をとろうとする	1	2	3	4
26. 卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む	1	2	3	4

図1 学生の大学教育観や授業への姿勢・取組を問う質問項目（出典：ベネッセ，2013）

実施年度には、学部生122名、長期履修院生45名の計167名が履修し、今回調査の対象とする学部生のうち、108名から回答を得た（回収率108/122=88.5%）。その内訳は、学年別では1年次生（0名）、2年次生（101名）、3年次生（5名）、4年次生（2名）、性別では、男（49名）、女（57名）、無記入（2名）、専修別では、幼児教育専修（5名）、小学校教育専修（54名）、中学校教育専修（42名）、特別支援教育専修（7名）であった。

3 調査結果

3.1 大学教育観

大学教育観についての質問に対するN大生の回答結果を図2に示す。明確に二分できない項目もあるが、全体として、図2左側の選択は、大学や教員側への依存度が比較的強い、あるいは学生にとって学びの自由度が比較的小さい教育に、右側の選択は、大学や教員側への依存度が比較的弱い、あるいは学生にとって学びの自由度が比較的大きい教育にそれぞれ分類される。図2に示すように、N大生は「出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい」や「応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業」を強く選好し、また「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業」を望む傾向が見られた。多くの学生は、何ができるようになったかという成果よりも、どのように授業に取り組んだかという姿勢に対する評価を期待し、授業に出席することで容易かつ確実に単位を取得できるような教育を望んでいると考えられる。また、「大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい」、「あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい」が多数を占めることから、広く浅く学ぶことを好む傾向も見られた。一方で、70%近くのN大生が「大学では、答えのない問題について、自分なりの解を探究する学びが重要だ」と捉えている。学生の多くは、主体的な学びの重要性を認識しながらも、現実的には確実に安易な単位取得を優先していることが推察される。

全国の大学では、主体的で対話的な学びの実現に向けてアクティブ・ラーニングの導入が推進されている。しかし、それとは全く逆に、75%近くのN大生が、「学生が自分で調べて発表する演習形式の授業」よりも「教員が知識・技術を教える講義形式の授業」を望んでおり、大学教育改革と相反する学生の実態が明らかとなった。

N大生の約75%が、「学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい」と答える一方、それと同程度の学生が「授業以外でも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい」と回答している。また、「大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい」や「就職については、大学の指導・支援にもとづいて活動する方がよい」の回答が過半数を占めている。このことから、N大生の多くは、生活面での自主独立性を重視する一方で、学習や就職については大学に依存する傾向にあると言える。

「高校までに習得すべき基礎学力の不足は、学生が自主的に補うべきだ」、「学生が知識や技能を身につけられ

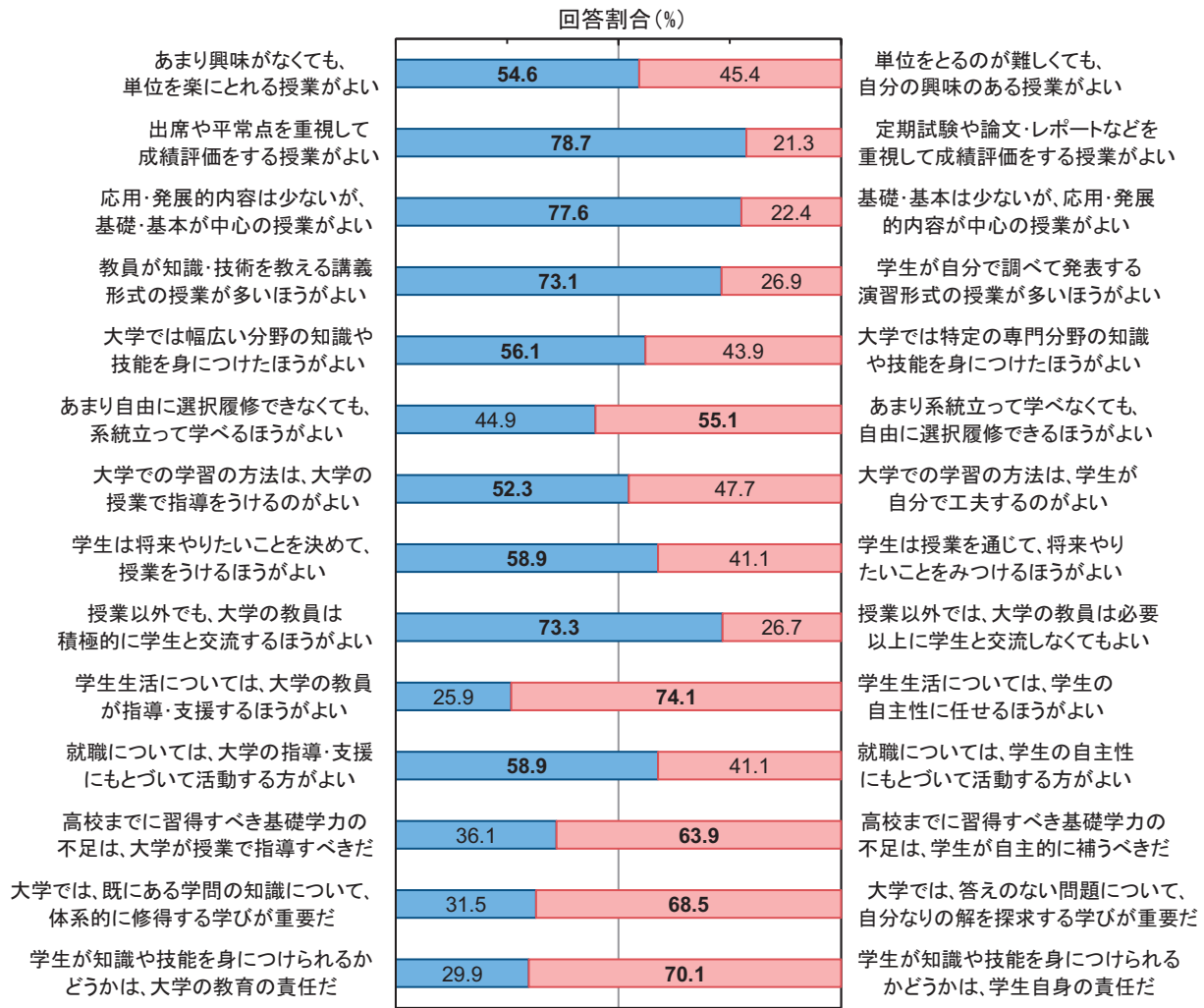


図2 N大生 (n = 108) における大学教育に対する選好

るかどうかは、学生自身の責任だ」と考える N 大生の割合は70%前後に達している。このことから、学びの成果についての責任を負うのは、大学ではなく学生自身だと認識している学生が多数を占めていると言える。N 大生の回答割合が過半数を占める項目を抽出して表1に示す。

上述の N 大生の結果の一部について、全国の大学生を対象とした2012年、2016年の調査結果(ベネッセ, 2017)と比較して図3に示す。N 大生の教育観は、概ね全国の大学生と類似しているが、以下の項目では比較的大きな違いが見られた。全国の大学生においては、「学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい」と答えた学生が2012、2016年共に半数未満、すなわち逆に「学生は授業を通じて、将来やりたいことを見つけるほ

表1 N大生における回答割合が過半数を占める大学教育観

どちらかと言うと、大学や教員への依存度が強い、あるいは学生側の自由度が小さい大学教育観	どちらかと言うと、大学や教員への依存度が弱い、あるいは学生側の自由度が大きい大学教育観
あまり興味がなくとも、単位を楽にとれる授業がよい 出席や平常点を重視して成績評価をする授業がよい 応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい 教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい 大学では幅広い分野の知識や技能を身につけたほうがよい 大学での学習の方法は、大学の授業で指導をうけるのがよい 学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい 授業以外にも、大学の教員は積極的に学生と交流するほうがよい 就職については、大学の指導・支援にもとづいて活動する方がよい	あまり系統立って学べなくても、自由に選択履修できるほうがよい 学生生活については、学生の自主性に任せるほうがよい 高校までに習得すべき基礎学力の不足は、学生が自主的に補うべきだ 大学では答えのない問題について自分なりの解を探索する学びが重要だ 学生が知識や技能を身につけられるかどうかは、学生自身の責任だ

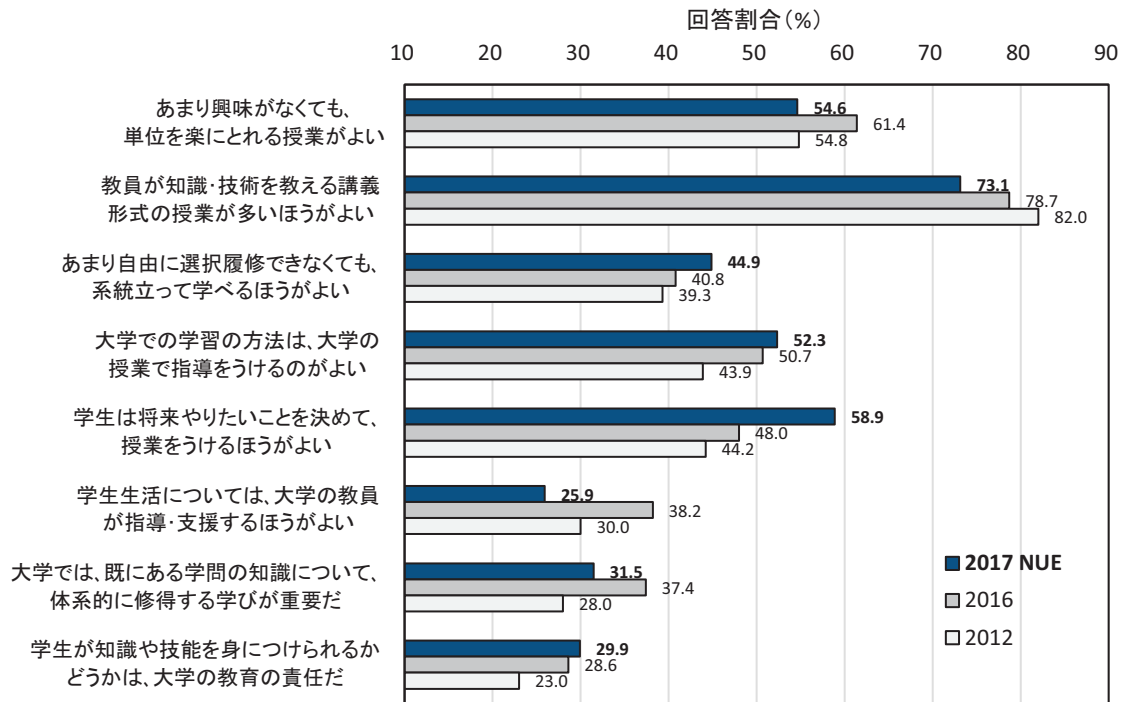


図3 N大生（2017 NUE）と全国大学生（2016，2012）の大学教育観の比較

うがよい」と捉える学生が過半数を占めている。これに対し、N大生の60%近くが、「学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい」と回答している。教員養成に特化したN大学においては、例年ほとんどの学生が強い教員志望を持って入学している状況であり、入学後も他分野への就職・進学等を検討する学生は少数であるためだと考えられる。

また、N大生における「学生生活については、大学の教員が指導・支援するほうがよい」の回答割合は、全国の大学生に比べて15ポイント近く小さいことから、N大生の学生生活の自主独立性を重視する志向は、全国の大学生に比べてより強いと言える。

3. 2 授業に対する姿勢・取組

N大生の授業に対する姿勢・取組について、全国の大学生対象の2012年、2016年の調査結果(ベネッセ, 2017)と比較して図4に示す。図4では、各質問項目に対して、「とてもあてはまる」または「まああてはまる」を選択した肯定的回答の割合を示している。全体的には、N大生の結果は、全国の大学生の場合に類似する傾向を示している。例えば、「授業で出された宿題や課題はきちんとやる」、「履修登録した科目は途中で投げ出さない」に対しては、N大生の約90%が肯定的に回答し、その割合は全国大学生をやや上回っている。また、「できる限り良い成績をとろうとする」についても、N大生の75%近くが肯定的に回答し、全国大学生と同程度である。一方、「計画を立てて勉強する」、「授業の復習をする」、「授業でわからなかったことは先生に質問する」、「授業の予習をする」に対する肯定的回答の割合は、N大生、全国大学生共に半数未満である。以上の結果から、N大生の多くは、全国大学生の場合と類似して、授業に対して最後までまじめに取り組み、優良な成績評価を得ようと努力しているが、自分で計画を立てて勉強したり、宿題や課題以外の予習・復習をしたりする学生は少数だと言える。特に、N大生の「授業の予習をする」、「授業でわからなかったことは先生に質問する」、「授業の復習をする」に対する各肯定的回答は、2016年調査の全国大学生の場合と比べて、15ポイント前後低い。N大生においては、授業の予習・復習をする習慣やわからなかったことを大学教員に質問しようとする自主的な学習意欲が、全国の大学生より不十分な状況にあると言える。

一方、「グループワークやディスカッションでは、異なる意見や立場に配慮する」、「グループワークやディスカッションで自分の意見をいう」に対するN大生の肯定的回答の割合は、それぞれ81.0%、74.3%に達し、全国大学生(2016)の67.4%、58.6%に比べて共に15ポイント程度高い。したがって、N大生においては、グループワークやディスカッションにおいて他者の意見を尊重しながら自分の意見も主張することを、全国の大学生よ

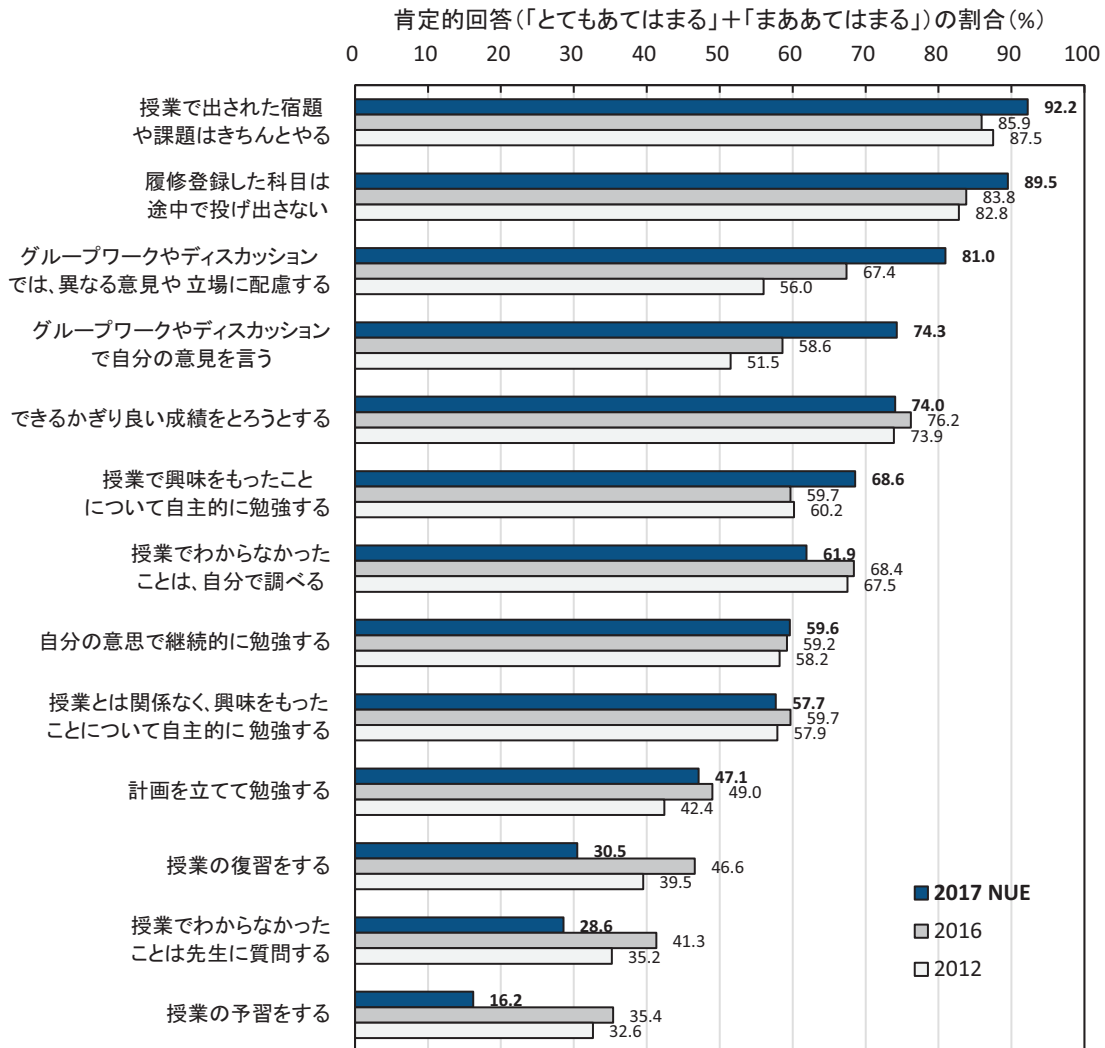


図4 授業や学習への姿勢・取組に関するN大生(2017 NUE)と全国大学生(2016, 2012)の比較

りも得意としていると考えられる。

4 まとめと今後の課題・展望

本研究では、教員養成系大学生の学習実態を把握し、今後の大学教育や教員養成の在り方を考えるための基礎資料を得ることを主目的として、教員養成系N大学生の大学教育観や授業に対する姿勢・取組について調査し、その結果を全国の大学生に対する調査結果と比較した。その結果、N大生が選好する大学教育は、全国の大学生の場合と概ね類似して、大学や教員側への依存度が強いあるいは学生側の自由度が小さいような受動的な学習であっても、容易かつ確実に単位を取得できる教育を選好することが明らかとなった。N大生の特徴としては、全国の大学生と比べて、将来やりたいことを決めて授業を受けるほうがよいと考える学生の割合が多いことや、学生生活の自主独立性を重視する志向がより強いことが分かった。また、N大生の学習態度も全体的には全国の大学生と類似し、授業に対して最後までまじめに取り組み、優良な成績評価を得ようと努力する傾向にあるが、自分で計画を立てて勉強したり、宿題や課題以外の予習・復習をしたりする学生は少数であることが明らかとなった。N大生の特徴としては、全国の大学生よりも、グループワークやディスカッションにおける対話的な学びを得意とする一方、授業の予習・復習の習慣や自主的な学習意欲において課題があることが分かった。今回のような調査を、例えば、入学時の全学オリエンテーション、全コース共通の必修科目の授業、N大学で例年実施されている合宿研修等の機会を利用して定期的に行うことができれば、各学年の学生の学習実態とその経年変化をより詳細に把握することが可能になる。今後は、調査を継続するとともに、明らかになった学生の学習実態に

基づいて、より効果的な大学教育および教員養成の在り方を検討していくことが課題である。

引用文献

- ベネッセ教育研究開発センター：「第2回大学生の学習・生活実態調査報告書」, (株)ベネッセコーポレーション, 2013.
- ベネッセ教育総合研究所：「第3回大学生の学習・生活実態調査報告書」, (株)ベネッセコーポレーション, 2017.
- 国立教育政策研究所：「大学生の学習実態に関する調査研究について（概要）」, 2016.
- 文部科学省：「大学改革実行プラン～社会の変革のエンジンとなる大学づくり～」, 2012.
- 鳴門教育大学：「鳴門教育大学学生の生活と意識 ― 平成25年度学生生活実態調査報告書 ―」, 2013.

謝辞

質問紙調査の実施に御協力いただきました鳴門教育大学の佐藤勝幸教授及び同大学の香西武特命教授に記して感謝致します。

Characteristics of Pre-service Teachers' Preference in University Education and Their Learning Attitudes

TERASHIMA Yukio

In order to understand about actual learning situations of pre-service teachers, we investigated preference in university education and learning attitudes for 108 undergraduate students at a national university of education (NUE) in 2017. As a result, we found that the NUE students prefer to acquire credits easily and surely, similar to the case of nationwide university students in 2012 and 2016. As a characteristic of the NUE students, most of them tend to determine their future careers before learning at university and to keep the independence of school life. The NUE students' learning attitude is also approximately similar to that of nationwide university students. Although most of them try to study hard to get a good grade evaluation, there are few students who study by themselves in well-planned way and do a preparation and review of lessons other than compulsory assignments. As a characteristic of the NUE students' learning attitudes, they are better at interactive learning in group work and discussions than nationwide university students, but they rarely do a preparation and review of lessons and ask teachers about learning. In the future, it is important to consider more effective university education and teacher training based on actual students' preference and learning situations.